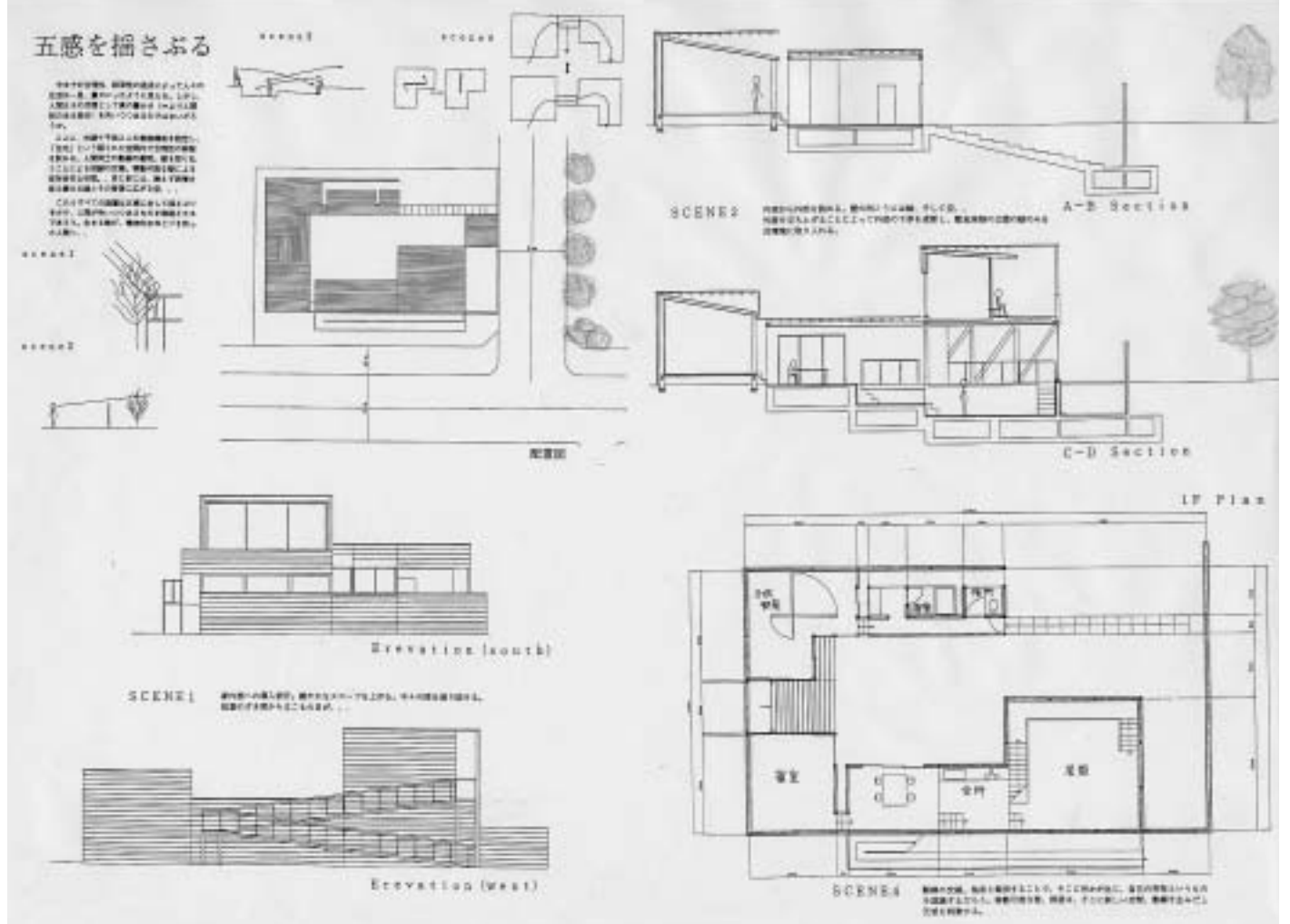
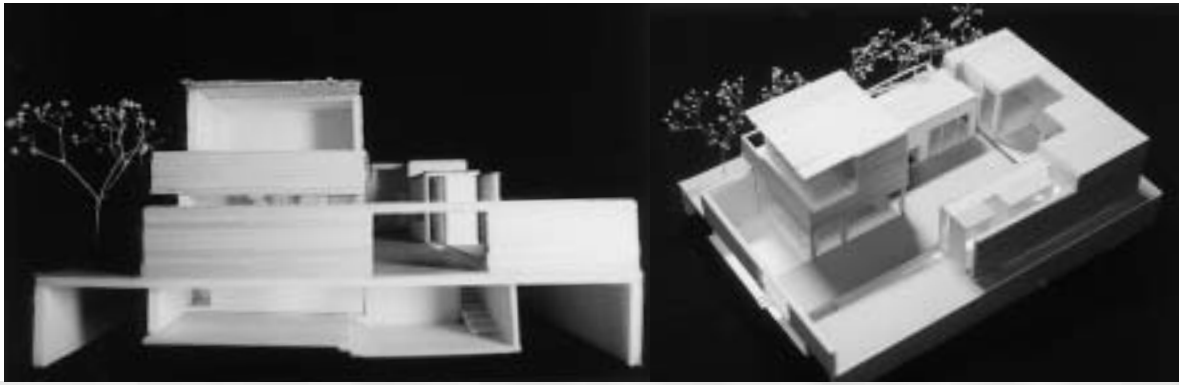


大西 正紀



建築設計製図 I

第2 課題
家族の住まい

2 年 1 組

- 担当：
野村 敏
若色 峰郎
小川 守之
小松 清路
杉 千春
田島 夏樹
田中 雅美

大西 正紀

ここに夫婦+子供2人の家族を設定し、「住宅」という限られた空間内で合理性の排除を試みた。

人間同士の動線の衝突。壁を取り払い、微小な段差をつけることによる視線の交錯。移動可能な壁や空間。目の前には、絶えず表情を変え続ける緑とその背後に広がる空……。

これらすべての装置は五感に対し揺さぶりをかけ、人間が失いつつあるもの(=より人間的な部分)を喚起させるだろう。生きる歓び、精神的ゆとりをもった人間へ……。

指導=小松 清路

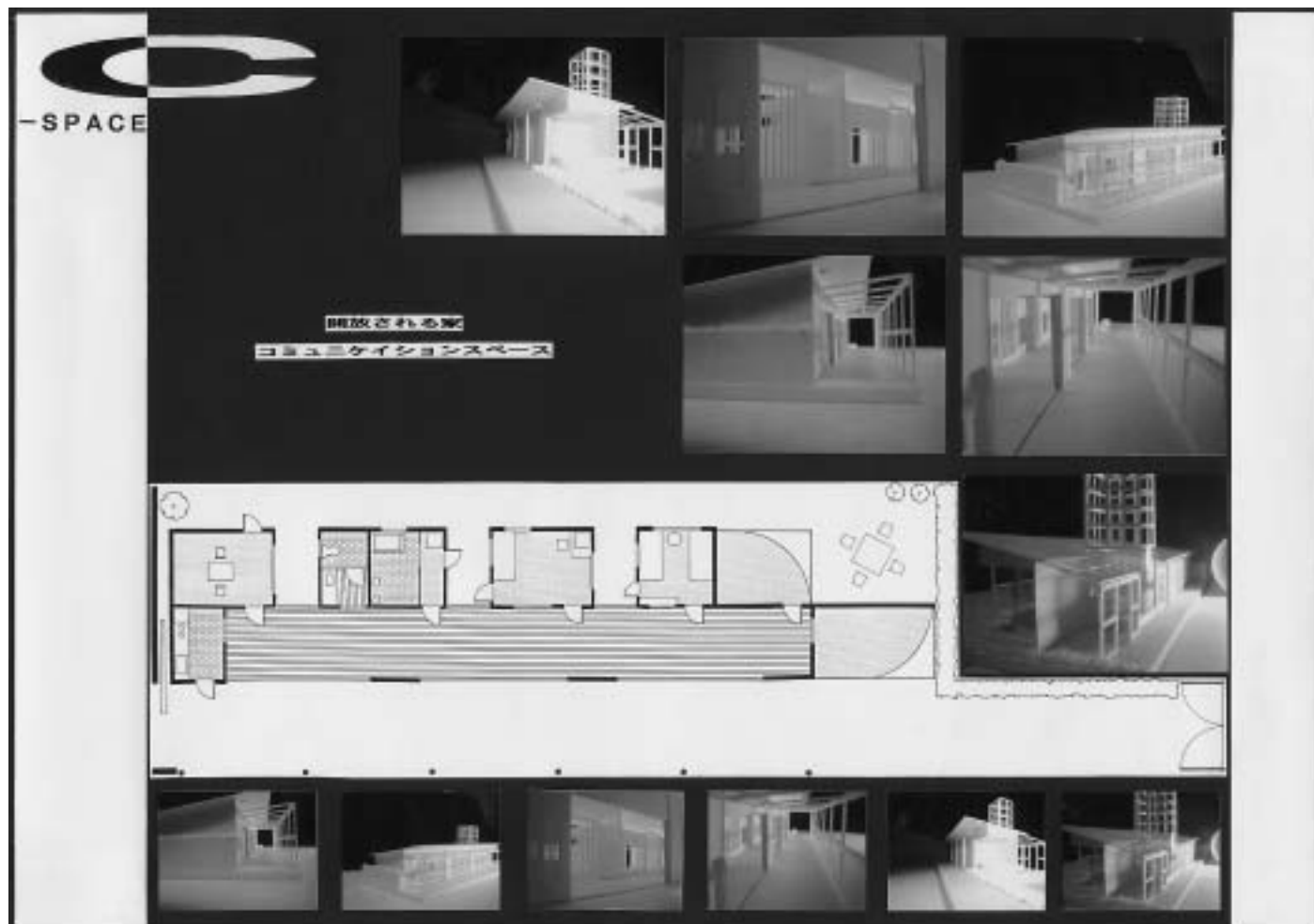
「人間にとって豊かさとは何か」という素朴な問いに対し、住宅という装置を通して答えようとするものが大西君の作品である。テーマとなっている「五感を揺さぶる」こと(sceneをつ

くりだすこと)が、人間にとって豊かなことであると解いている。また合理性の排除という近代に対する反旗を翻し、動線の衝突、視線の交錯をキーワードとして、いくつかのsceneをつくりだしている。

敷地は公園に対面した角地を選択し、公園の木々と空を借用しようという趣向になっている。つまり、公園に接した敷地は、大西君にとって必要条件であったようだ。断面計画において、それぞれの生活場面に視線としての計算がされている。2階にある玄関へのアプローチは、長いスロープによって木々の移り変わりを楽しみながら、内部へと導入している。この場面は、住む人々に、また訪れる人々に

時間的な豊かさを与えるに違いない。玄関は縁側風であり、多様な場面が創造できそう。2階の玄関から半地下の居間へと導き、各機能をもつ場面へと展開し、最終的には外に出て半地下のドライエリアに至っている。この間、家族同士の動線および視線の交錯によってつくり出される場面は、ひとつのストーリーを生むだろう。そしてストーリーはドラマトウルギーを要求し、建築は住む人々を身体レベルで組織していく装置として役割を演ずることになるだろう。

内部に潜むストーリーを意識させないものとして、外観を包み込んでいる木質は、心地好いものになっている。



増田 充朗

現在、私達の周りではコミュニケーションが不足しているように思える。そこで私は、下記の点をポイントに計画を立て、コミュニケーション、そして、プライバシーからパブリックへの流れのバランスをはかった。

- ・2本の道路を庭である小道でつなぐことによって、人の流れを敷地内に注いだ。

- ・リビングを長くとり、廊下・多目的スペースとしてその場を利用できるCスペースとした。
- ・リビングを開放すると、小道を含めCスペースに広がりを持たせられるようにした。
- ・どの部屋もリビングに隣接して配置することにより、生活動線の中でコミュニケーションをはかれるようにした。
- ・個々の部屋は裏庭につながっており、裏庭は家族だけの特別な空間になるようにした。

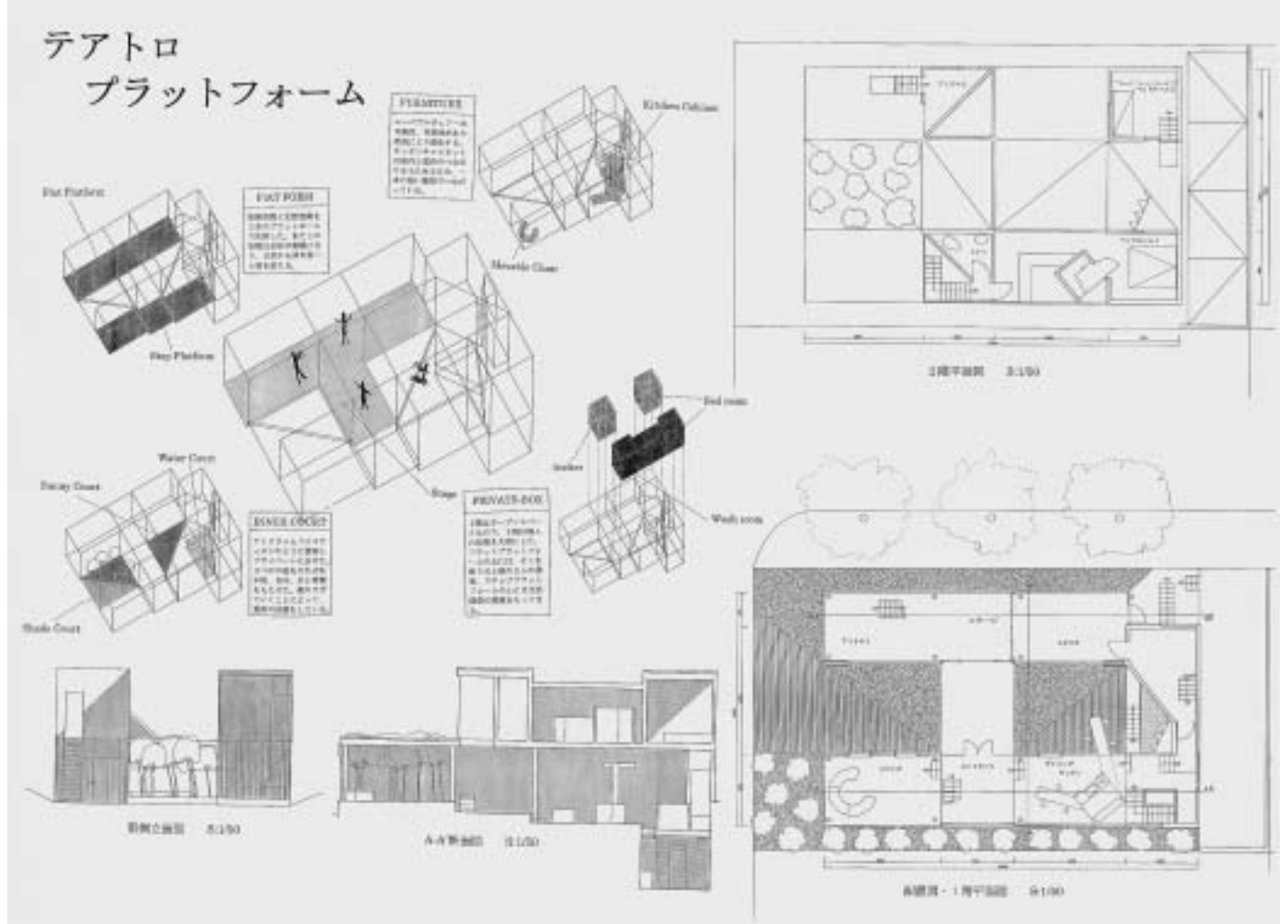
指導=田島 夏樹

高気密、高断熱、厳重なセキュリティシステム、様々な抗菌素材等と、現代の住宅は高度化する都市・社会構造と共に多くの

複雑な課題を背負わされている。そこで暮らす人々も然りである。近隣同士が場所や時間や様々なことを共有していたおおらかで寛容な時代から、切り捨ててきたことは計り知れなく大きい。私達がもう一度これをおつかつとは違った形で獲得しようとする、計画の視点は個人一家族一近隣、住宅一集住体一都市と徐々に拡がって行く。いくつかの矩形ブロックの組合せによる敷地取りで始まるこの課題では、敷地分割方法により住宅を性格付け、計画をスタートすることもできる。この作品では、街区を貫通する形で南北方向に細長い敷地取りがためされ、ここを通り抜けられるように、縦長の敷地をさらに細く3

つに分割して、通り抜けが可能な路地状空間（外部）、公共性の高い主室（内部）、個室群、と段階的にプライバシーの度合いを上げて行く明解な階層構成がとられた。個室同士は互いに坪庭を共有し、空間/個人が集合して行く図式を明解にしている。路地状空間と主室の共にリアで冗長な関係とその仕切り方、細長い主室の使われ方、路地状空間が何の変哲もない新興住宅地でどのように受け入れられ、人々と関わりをもって使われるかなど、いくつかの疑問を残しているが、広く近隣に対しても問題提起をしつつ、積極的で明るい希望に満ちた住宅が提案された。

新井 みどり



建築設計製図 I

第2 課題
家族の住まい

2 年 2 組

- 担当：
宇杉 和夫
石田 道孝
本杉 省三
川口 とし子
白井 勇
白江 龍三
山崎 敬三
20

の住宅を提案した。
画家の父、園芸が趣味の母、ダンサーの娘という家族構成を設定し、1階を半公的、2階を私的な空間である住宅にした。
1階は2本のプラットホームに見立ててフラットプラットホームを趣味的、ステッププラットホームを住宅空間とした。フラットプラットホームはステージに、中庭やステッププラットホームは観客席に変わる。このように公から私、私から公へと変化する。

新井 みどり

現在の標準化した、個性のない住宅地や家を改善するために、並木のある通り、光のある家、中庭、劇場をポイントとしてこ

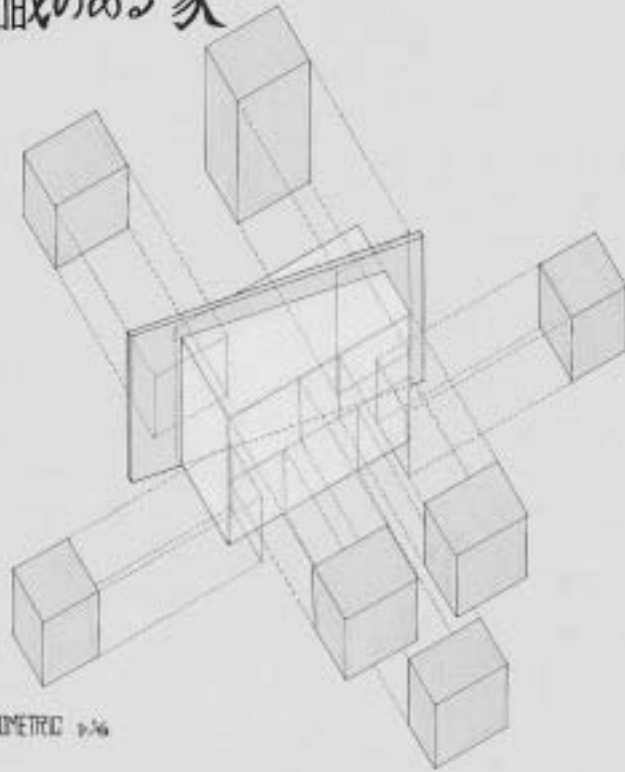
指導 = 宇杉 和夫

試行錯誤のあと、段階的な2つの中庭を取り込んだ家に落ち着いた。こうなればアトリウムとペリスチュオンの、ドムス型住

宅のイメージへの一本道。しかし、ここからがこの案の独自な、もう一回の道程が始まった。それを導いたコンセプトは「プラットホーム」。行き着いたところが「テアトロ」。空間的内容的には2回ほど設計に取り組んだことになる。その分、こちらにも多少のしわ寄せがきた。彼女の案は、あの北習志野の標準化された扁平な住宅地・隣接する住宅団地の批評から始まった。一つのプラットホームは並木道に沿わせたガラスのステージ。夜の黒い並木に光と影のアトリウムとダンスのスタジオ。これが通学の学生たちと不釣り合いな均質化された住宅地に何をもちたすことになるか。次に木立の中庭を挟んで並行するもう

一つのプラットホーム、家族の空間。これも遮蔽可能なガラスの空間。ここからやはり木立を挟んでアトリウムのステージが見える。ささやかなショーもできる。内部空間はモビリティとフレキシビリティ、赤のダイニングキッチン装置。プライベートな空間は2階のキューブ。明快なコンセプトからディテールまで質のあるデザインが続いた作品は例が少ない。この他には、以前の自然地形を再現し、その上に現代的コンポジションを重ねた海老原綾さん、かつてあった農家の庭を思わせる門と中庭をカーブした金属質でまとめた伊東梢さん。個人の空間から家族の空間へ繋がる家の飯田真弘君が私の班から一緒に発表した。

存在意識のある家



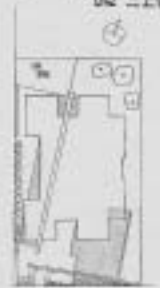
AXONOMETRIC 1/40

家全体としての空間のつながりや連続性を意識し、各部屋の空間を連続的に展開させるようにする。

一般的に部屋は「エリア」で構成されるが、ここでは「エリア」を「ゾーン」として、各部屋の空間を連続的に展開させるようにする。このようにすることで、各部屋の空間が連続的に展開され、各部屋の空間が連続的に展開される。

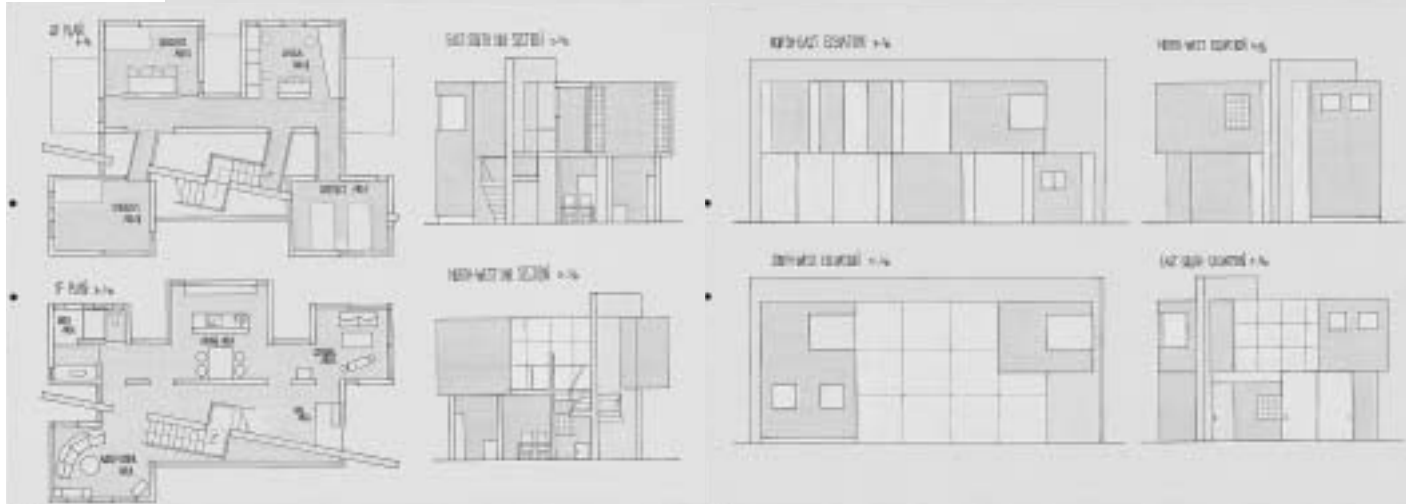
このようにすることで、各部屋の空間が連続的に展開され、各部屋の空間が連続的に展開される。このようにすることで、各部屋の空間が連続的に展開され、各部屋の空間が連続的に展開される。

図2 三上哲也



SITE PLAN 1/40

三上 哲也



三上 哲也

休日でもない限り家族全員がそろうことが減ってきた現代では、リビングとして1つの空間を設けることの必要性があるのだろうか。そこで家全体を大きなリビング空間として機能させることで、別々の場所においてもお互い存在を確認できるようにした。一般的な部屋を“エリア”としてオープンにし、直接的・間接的に常に意識できるようにすることで、従来と違った家族としてのあり方を発見すべく解決策の1つになるよう試みた。

指導=白井 勇

各自が住まい手のライフスタ

ルを想定し、それにふさわしい室構成・空間を提案する課題に対し、“存在意識のある家”と題した計画では、家全体を連続性のある一体空間としてそこで展開される家族生活をもそれぞれの人間の存在が確認でき、結ぶべき深い関係が意識されることを意図した構成が考えられている。

この問題意識の具現化がドアのない部分の集合体とした空間となって表現されている。空間で起こりうる生活像の可能性と空間の豊かさが一致した時、“住まい”という概念がより明確になり関係の増幅が計られるであろう。そのようなシーンを感ぜさせる提案として評価できる。また、敷地の選択は良好な住宅

地の南西の角地で南側には道路を挟んで公園があり、この敷地に対して、街の区画軸とは異なる角度の壁を建物の内部空間を分割するように設け、重要なきっかけとなる存在感のある対象としている。これは、街並みに対するインスタレーション的な存在感を与えている。

だが、建物全体のフォルムの構成が、壁による立体化されたモンドリアン的な表現なのか、キュービックな立方体の結合なのか明確でなく曖昧さが残されている点は、文脈の中で考えなければならない。また、ネーミングされた室(空間の部分)が一定の使用目的を想定したときの構成上の制約も検討される必要がある。